

昨年の中学二年生の学力推移調査の国語の問題に宮下奈都さんの「スコール No.4」という作品が出題されました。この作品は読書ノートにも入っていて、私はテストに出る以前に読んだことがあったので結果が返ってくるまで、おそらく内容把握の問題は大丈夫だろうと思っていました。しかし、結果は散々で登場人物の心情を選ぶ選択問題が全て間違っていました。これは私にとってとても大きなショックでした。読書が趣味と公言していますし、作者の宮下奈都さんは私のお気に入りの作家の一人にもなっていたからです。

結局、この問題については自分の中で納得することはできたのですが、この出来事を通して人が人を評価するということは簡単に行うことはできない責任の伴うことなのだという、また私たちは日頃あまり考えずにそれを行ってしまっているのではないか、ということを考えました。

まず、冒頭にも書いた物語の解釈についてです。私は国語の授業で先生から作者がおかれていた状況や国語の知識などをふまえて物語の読み方を教えてもらうことはとても興味深いと思っています。そして納得もしています。ただ、教えてもらう解釈はあくまで一つの読み方であり、そもそも物語のおもしろさは読む人によって様々な受取り方ができることにあると思っています。ですからテストにおいて、全ての人がこういう解釈をするであろうという前提でつくられた問題には疑問を感じることもあります。また新聞で、ある作家が自分の作品が使われた大学入試の物語の解釈に関する選択問題を解いてみて、選択肢は全て正解だと思ったという内容のコラムを読んだことがあります。

次に例を挙げるのは面接です。私自身、面接を受けたことは数えるほどしかないのですが、この程度の時間で私の何が分かるのだろうかといつも思ってしまいます。面接のシステム自体を悪いと言っているわけではありません。受ける方は限られた時間でいかに自分をアピールするかを考えなければなりませんし、選ぶ方は今の私には想像もできませんが、人の人生に影響を与えるかもしれないというとても大きなプレッシャーがあると思います。そのくらいの覚悟をもって選んでほしいとも思います。

最期に例に挙げるのは裁判です。裁判官の方々の中にまさか生半可な気持ちで仕事に就いている方がいるとは思いますが、それでも冤罪ということはありません。そうでなくても死刑か無期懲役かではとても大きな差があります。そして特に死刑と裁判員制度が存在する日本に暮らす私たちは目を背けてはいけない問題だと思います。私たち中学生は五から七年後には今まで全く赤の他人だった人の生死を決める権限を持つ可能性があるのです。そのとき私たちは後悔をしない選択をすることができるのでしょうか。私にはその自信はありません。もしかすると考えたからといって解決する問題ではないかもしれません。もちろん四六時中考えていなければいけないというわけでもありません。でも心の片隅に留めておいて良いのではないのでしょうか。

始めの私の失敗談から話がとても大きくなってしまいましたが、これらのことは人が人を評価しているという点で重なる部分があると思います。そもそも自分以外の人間の本当の気持ちや本当の性格は本人が隠していたら分かるはずがありません。疑うという立ち位置ではなく、その人のことを決めつけずに人と接することが大切なのではないのでしょうか。